吉野拾遺名歌譽

上

912.5
Y675y

088930-001-8

912.5-Y675y

吉野拾遺名歌誉

依田　学海/著

上

M20

DBK-0114

吉野拾遺名歌譽

吟室偶題

912.5 Y 67 27 5

吉野拾遺名歌舉敏

古今戯場脚色。凡不過就前人之公案。少變其面目而已。故前後章段。自只一定格法。而存写千篇一律。竟全變化。其揉撫之迹歷々可數也。而老優以此為常格。觀者以為固然。甚則敗風俗害

明治丁亥一月
東京鳳文館刊

国立国会
26.9.10
図書館

244731

人情。殆有不忍道者。間論其不可則若口口辭。字不可破。要生吾議者与焉耳。近日新築劇場。聲華盛矣。士群贊成之。依田君學海平生好觀劇。夙抱其說自起任之。以張華博物之學。坡老風流之手。間旋事

華作傳奇數齣。題曰吉野拾遺名。張樂。事實已正。言語已優。於人情形勢。之致思焉。抑學士涉筆。實以君為嚆矢也。他日場成演之。士女如雲。喝采。若雷四方喧傳。亦有聞君之風而起者。洗濯盛習。新人耳目。則君之

唱えゝ。豈不二偉乎。平賀鳩溪著
神靈矢口渡院本世傳ゝ為
奉覧比君叫編。未可同日而語也
明治丙戌新春祭日
拙軒散人邦山法隆撰

香埼辻順宣書

凡例

一此篇本年十月十七日築地大橋ゟ於て刷板改良今負の聽を頼いし。その編を請ひしゝゟ。今負話ゟ種ゝの説あり て。余もまゝ大ゟその説ゟ拔し。改正もべき箇所数多く。せてゟ改正せんとせしゝゟ。事多くして未だ時あらずそのまゝ中ゝて未過しゝ。此ゟ今回子来りてこゝをみて刊行せんとゝ請ふ。余改正未だ成らざるをもて辞せしゝど。子回子まゝ改正せざる本も。反りて喜面目をみるべしとゝ。固く請ひ。さゝばそのまゝとことわりて。刊行をゝとれそ。ゟ しゝも読ふの好意ゟ中ゝ多ゟもあらば。又この我本ゟ改良我ゟ用ふるもあゝぞときけ。ゝゝゟ改ゟべゝ

らぶといふまうせて。うく刊行せる事しふかりぬ。

一原本は孫兵衛の所有なり。もとより改正をべきなれ。刪りをてしやと思ひふるをもどるべきまゝ他書をおにより。よりある評も多くれば。そのまゝ。

一此本と他りしめち。伊國の栽培本を得さり。古人の集を活ふるこゝろをれを得し。余が著をもて。おもを潤をし。我國の栽本をあらゝめゝ。ぬるられを刊行せんとて。その名をこゝ婚とつけゝり。本編この餘あまゝあれば。つゞきて刊行せ度。

明治十九年十二月　　常陸長士志るし

吉野拾遺名歌卷

協別

序幕　吉野行在所熱門外の場

奔内侍書司の場

仮陣営正行屋敷の場

皇居長廊下の場

國摩　大和國六田川原の場

同　山麓の場

吉野山つゞき山中の場

二幕目　楠正行仮陣営の場

三幕目　吉野皇居殿下の場

吉野山茶屋花菱屋の場

国姓爺大橋　吉野奥御殿楠屋の場

役名

一　四條大納言隆資

一　楠家の老僕巣達義六

一　楠小次郎正儀

一　左近衛大将早俊

一　楠大和守正村

一　警固平四左衛門景

一　多田院別當千覚法橋

一　里見左馬之助義遠

一　警固所等関係者

一　多田院若宮楼山丹下

一　古近衛大将道順

一　浮賀平次國枝

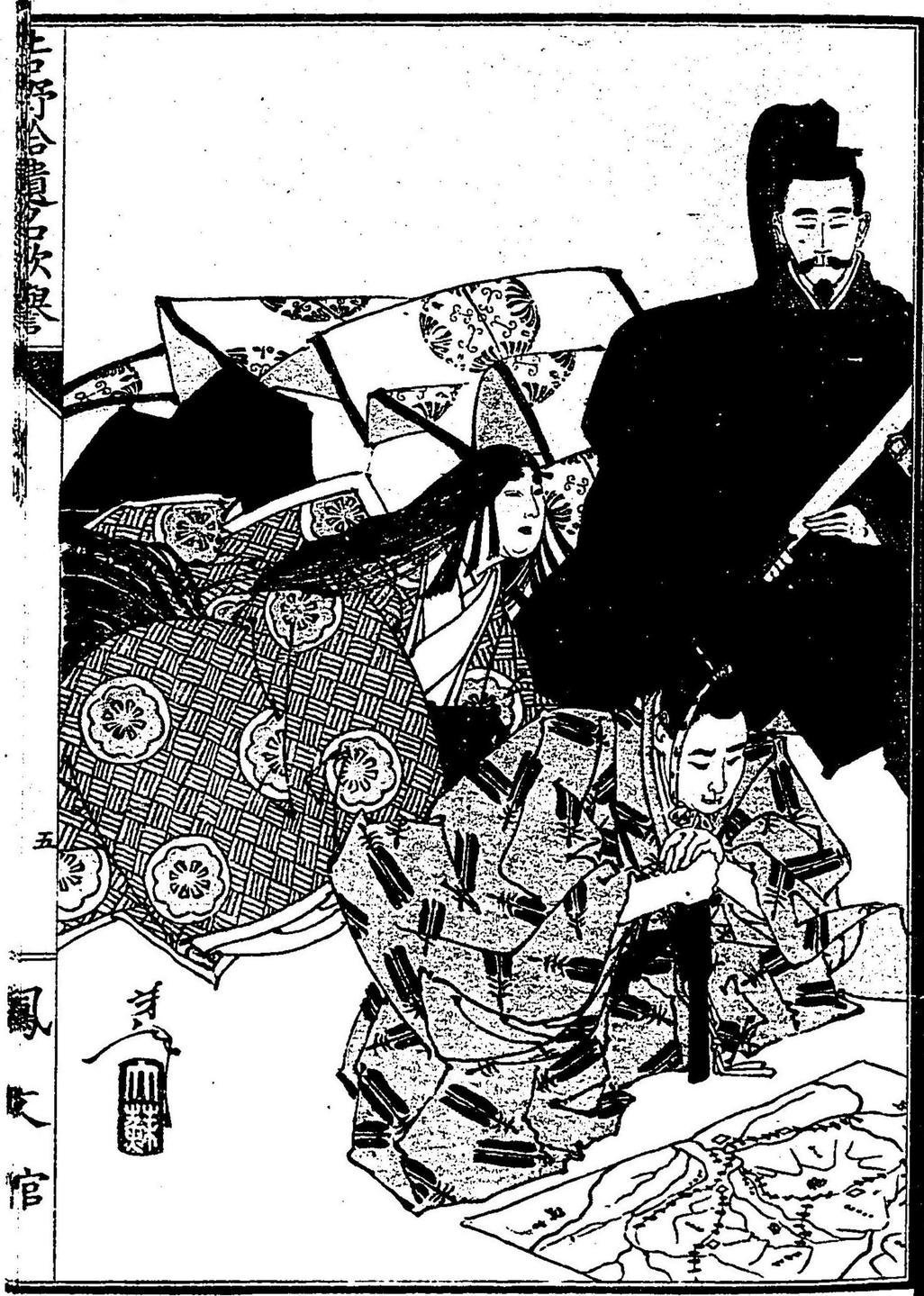
一飛坂名郡忠基
一辻風厳馬
一楠　將監
一楠の臣和田籌智源秀
一同　和田籌名郡山籌
一同　和田紀六左衛門
一同　関　良国
一同　南宮八郎正直
一同　喝尾七郎正道
一拾弁納言量明

一碧池宮九郎正郎
一内侍の侍女梅ヶ枝
一伊賀の局
一弁の内侍
一里見の臣浅川主計
一楠左金吾正行
一雑色
一仕丁
一侍女

一　楠所等
一　嶮岨所等
一　軍兵大せ以
一　百姓

三傑
雙美
一心
為國

丙戌歳秋　不知老人題



内閣文庫

吉野拾遺名歌誉

序幕

吉野行在所惣門外の場

矢の内侍書司の場

仮庫堂山彩屏閣の場

皇居長廊下の場

同返

大和國六田川原の場

同山ふもの場

学海居士 戯編

宝岑道人

耕雨小史

内閣文庫

先把舊史本文。鋪張一番。以襯染下文。

吉野山續き山中の場

本舞臺ズツト上へ寄せて。檜ゝぐ葺の四ツ足門と鉤ふた せ。上下一間ヅゝ帝所風の殿堂山面より下手へ有ゝ樹木のあしらひ。向ふ一面山ゝよ樹木の茂りたる遠見。中樹木の家より行在所の玄関。殿堂の後ゝ遠く見たる書割。拍子ぎきゝ。ちうよう〳〵。さゝべゝ吉野行在所惣門外の体。

〔平次〕先帝吉野山へ帝幸なりしより。數へて見れば早や十余年。新田楠の両將と始め名ある智勇の人〻。次第に滅亡し。小具足附太刀ゝ床几よかゝり。下手より仕丁三人棒と持ちひろゝ居る山ゆゝ。暮れ。

先帝吉野山へ帝幸なりしより。數へて見れば早や十余年。新田楠の両將と始め名ある智勇の人〻。次第に滅亡し。小具足附太刀ゝ床几よかゝり。下手より仕丁三人棒と持ちひろゝ居る山ゆゝ。暮れ。

〔平次〕夫のみあゝび法國の官軍開かねば遅とゝ限りて迫まる。但し帝運の末なるか。扨みゑ歩き合の有様を見れば思はるゝや

〔吾三〕いかゝも和どのゝいひ〻如く。畏くも先帝よりかゝる。いぶせき仮宮にて。日夜叡慮を悩まし奉り。新欲誅伐の志しも果しあぐみ。終に崩御在〻して。軽家ゝ屬する者共。閑夜に燈を失ふ心地。勇氣もくじけ心そよろ〻。欲きふ場ゝ討死し。殘る忠義の者共。ゝを殘石ゝかたむきど。或ゝ討死。或ゝ病死。日ゝ增し軍威の衰ふるゝ。未だ朴の面〻ざるゝ。

儒弱兵士。言語自如此。

と昭め河内和泉の二ヶ國なりしに果しはありさま。

〔兵工〕されど一ツの楠とぐふと。元年湊川まで討死あり。楠正成公の嫡子正行朝臣。年いかゝ二十三四かれども。智略い故中将よりおいらぎ。亦よもぐまい勇勝義烈。

〔平次〕和田足地を始めとして義を金剛よりかゝめたる一騎当千の雪臣多く嵯峨帝を補佐。なり。多氏が強欲よあたり未だ一度の敗を知らず。戰ふ毎ふ毎度の勝利。

〔兵工〕既よ去月河内の國叡山林又藤井寺の合戰ふ紙将細川俊興ち顯氏と敗ふ。さもぶの高の師直も恐れて軍サを止ば。先い俊ふ楠の武功よよれり。

〔平次〕まうとよ称れる名将軍。比べかゝておいさんりと。去

先将正行一點蓋男主先見乃文法。

歴史本文。點綴得好。

壮士死い無事安泰。

〔兵工〕頓て城徒と討亡。弟ひ君の仇遂と完。対方を有らんとなぞれば。

〔平次〕是ど味方の一ツの彩。

〔兵工〕いよ〳〵分骨砕身ー。

〔平次〕忠義の二字と。

〔ま人〕麿き申さん。

〔平次〕イヤナニ方昔と怪き事分と申ら君の仇為れまんぞ。

〔仕丁〕〇へ〻く私生い武家と迷ひ年ゞ年中幕と打て仇掃除を致ー居きば。

古語云。為君御楯以當敵。亦是等語。

此一語。引出下文。

△何の法没ゑ立ぬぬ。忠義よ二ッいちざりれねば

□楯のかりよ、とへ出て。命と張りゑ働きまて法恩報ゞと

殺しる。

〔平次〕ヲヽ出ゝ〜ふ〜よ〜申〜。か〜下〜の者迄も。忠義る

一命惜まぬ。働ゑ要德の及ぶ處。

〔長工〕頓て栄と見るぐ出ざろふ。○イヤナニ甚方共もか〜る

時節のちとふれば。若〜敵の間去かこの。入込まんかたから

ず。あ中きものとえさをしぶ。ふぞ共ゑ心を付けよ。

○畏こまりてござりまる。怪〜き者と見さ射い。

△寄てゆ〜つく引捕へ。

□ちぐゑひきづって参りまし。

〔平次〕ヲヽ。ゆず共ゑ油断いさまぬ。さき程より余程のひま入

り。イザ一ト廻り見廻り申さん。

〔長工〕イザ法岡道殺〜申さん。

ト石の鳴物よって両人上手へ入る。

○今のお二人りの咄〜の通り。楠様ゑ法はるさゝひ。たんで

も軍サ。ゆ猛ゑ相違ふぶひ。

△とか〜云ふ内ゑ敵方の間者のやつゞも。つかまへて立身

出世をしたゞくものゞや。

□アレ〜向ふのうふんゞやゝら。希体おやゝ行ゆみ〜ろぞよ

○キヨロ〜〜〜いて〜ゝかゝらい。何でも間去ゑちがひたひた

たきのめ〜てゑ柄ゑ仕申ゝぜ。

口中形容模様來妙。

△油断ともるなよ。

□合点ドや。

ト三人身がまへ、ともろ事とろ〳〵有。山ヤロ〳〵合方して。

向ふ鳴雷の御畢突傳兵。きり〳〵わらかづら胴服小袴一本

桔草鞋振りして出て来り花道へ。

〔伴吾〕ヤレ〳〵、〳〵たびれ〳〵。ごふぞ早く店主人よ出目を急ぐ

ゝこのドや。

ト直ち本舞臺へ直る上手へゆきかける。仕丁三人上下よ

り取りすゝき。

○怪しいこと也もの。

△□はふうご〳〵なる。

ト見まうて。伴吾思入して。

〔伴吾〕アヽイヤ拙者い。是ある吉野よ店主公と仕とむる者ゞ

して怪しゝ者でい店左りまぬ。

○イヽヤいつて言ひぬけても。おみ〳〵なるぬつら魂。

△疎よまつまい見なれぬやつ。いたずらと思ふて京方の。

□間者のためよ遣なのサア尋常よ名ふて仕まへ。

〔伴吾〕イヤ波しして左様ふ者でい店左るぬ。主人の使ふ旅行な

し。只今帰りて来り者ごふぞ暫を出通しなれ。

○ヒを名も名乗らぬ。通らんとい。

△いよ〳〵もつて怪しいやつ。

□ひつて〳〵〳〵。詮議ふさん。

未説出主人姓名。自覚遮面慶。妙絶。

244731

〔仕丁〕さりとていと速くよるどふぞ鞍ひはらしてをれ。

○エヽそんじどふなソレ。

ト早目たら合方そ。三人一度よかゝる。一寸立廻つそ。きつとなるぱ。舞上手の奥より。鷺野平内左衛門舞高蹴左無烏帽子附太刀。草履ときき出て来り。

〔平内〕ものどもひかへ。

ト是にて四人下へひかへる。

まあるそのい身共が部屋ぬず怪しい者どいあひぞ。

○おそんならあ形さの庄家来で庄ぢまたら。

△一図よ間者と思ひぬみ。

□とりけもあひそふと殺しまそ。

不怒罵虜。自有些蹺蹊。

○吾絶えんを成て

〔三人〕云下ませ。

〔平内〕是と申さいも甚方共盛間よおろそかならざるゆゑ変て怒むる如ふをひ。用事いあいゆけく。

○へイ〳〵有りがとふ庄ぢりまそ。おゆるしの出と上から

い。

△私どもい是ちろちをぐよ。

□部屋へ寄るで庄ぢり本ふ。

○へイ云雑ふ庄ぢり本る。

ト仕丁三人下へさはる。此合方ま出おろしとかをりて

蹌踉あしりつ思入して。

密使不説破。反覚妙。

〔平内〕並て多田の院の別當こゝへ合せ。密事のつゐひ大義で有と近ふ〳〵。

〔佳吾〕ハヽ、他ぢと憚る大事のお使ひ。骨屋よく〳〵て。彼方よりお返事ぢ系り事〳〵。

ト懐中より密書を出して渡す。平内受取りて。

〔平内〕シテ別の仰いふのりゝ。

〔佳吾〕お返事の其外ぢ。仰を受けさる機密の大事。吾仰の子細〻申さい。

〔平内〕アヽコレ。

ト耳をおす。佳吾さ〳〵やく。平内一こうなぢ〳〵事まうしく。

ヲヽよし〳〵承知致し〳〵。さゆ付ら用さもあれば。汝い是より陣所へ系りひしまづ休足致さとがよふ。

〔佳吾〕左様ぢれば。様者めい。休足致さでゐ生り事ふ。

〔平内〕ヲヽ、太義でゐる。

〔佳吾〕ハヽア。

ト前の通りまて。伴吾下手へ入る。警固詠を云送り。あたりへ思入有てこの密書の封を切り。讀みやと。上手の門の内より。多田の院法橋清ち蜜坊主ひづら。烏帽子附太刀草履まて出て来り。

放一箇去。即迎一箇来。

〔多田院〕ヒヤ野どの。

ト是まて。警固詠びつくり密書をかくす。

是ゐ古生つさか。

不直入密事来。下一蹴。

師直事。不説出一字。使看者不能猜着。

〔平内〕なにかと思へばふる郷どのびつくり殺しぢやな。

〔多田院〕申合せ一義は付。内々の居どころを尋ておつて。

〔平内〕兼て法才と申合せ一義。上首尾ではある。

〔多田院〕ナニ上首尾とな。

〔平内〕彼方よりいて送り書物を見せ成。

ト懐書を出してえんせる。多田院取てよむ事有て。

〔多田院〕何さほど文でかいでい大文夫。ナレは是ある文中は。逢て教とゝるあれど。其次第のほどならぬ。内々ある事ゝは存じたるや。

〔平内〕其義い郎黨伴兵より。事つまびらかに申こされ。

〔多田院〕シテ其れゝみの次第とゝふい。

不自説者説出。自聽者説出来。乃妙。

両國二字。遥照篇首。

向多田院口中。補叙前事。於文為省筆。於事為避板。

〔平内〕其れゝみと申さハ。

ト耳ゝ口とよせさゝやく。

〔多田院〕スリヤ嵯峨所の女房の内。美人ときこつの弟の内侍かゝうでは在る。

と。

〔平内〕夫さゝ首尾よく渡ゝたなら。宮みの通り両國と與こんとある此文でい。

〔多田院〕いまゞ都ふありしゝき。嵯峨の花ゝの兄ゝ。よゝなゝいられさゝいふ事い人の噂ゝ聞きゝ。左程ゝ執心ゝ。ろゝ。イヤまふゝい安き事。さゝゞかゝゝ女のひとり。拙者家来ゝ付。今宵の内ゝぬをみ出ゝ。彼方へ渡ゝ申さん。

又向平内口裏。補内侍及伊賀局平素。何等軽捷。

〔平内〕イヤ〳〵それハ覚束なし。たゞ女といひ申せども。アノ年の内侍ハ先つよい。北條二ツ時の若めよ。あつなくうされハ右中弁俊基の娘すく。先帝の法華ハ法華中ハ勤仕ハて人よりつゞ事と殺ハ。忠義一図の義烈の女。まのみあらず法華ハ。ちり。年の内侍が妹と為。新屋ハ者ふ伊賀の局ハ新田の男臣藤塚澤女房が娘ハ。容貌美麗の女ハ似合ぞ。壮士も及ばぬ元双の怪力ハ。るものがつきそひ居ぞいうかつよ事ハまかゝれぞ。計略を以てだまそにそふし。法義を付ていを一工夫殺ぞでなるらふ。

〔多田院〕イヤ〳〵夫ハ餘り思ひ過ぎたり。和どの〳〵器量より引くらゝで彼が勢をまゝと申ものハ法の事ハ〳〵ん。

此一句、反現出一段文字。

密書須着眼。

義ハ捨者ハお任せ成。

〔平内〕和どのハ左程ハ仰あれどあふどう雖き二人りの女。法義ハひらふ。某が思業ハ法れば和任せ下。

〔多田院〕日比の男氣ふ〳〵ハ。要心をぎさ和どの思業。齒がゆひやふまい存れど。左程ハ仰ある事。まづい和どのハお任せ申さん。

〔平内〕細工ハ流〳〵仕上ゲの程ぞ。

〔多田院〕首ぞのぞ〳〵お待申ふ。

ト少ハ不平の氣味ハて言ふ。

何ハいもあれ。是ある書簡。

ト密書ぞ渡ス。壮士ハ受て懐中する。上手より多田院の姿

黨横川丹下。掏掇小袴一本指すて出て来り。

〔丹下〕市主人是よりお出有しゝ。只今飛脚兵衛どの。何うお談ト
の筋有とて。内へ小店出り来る。

〔宮田院〕然らば。左程案ろで有ふ。

〔雷内〕つゞいて見仰ぬ。従者へ。

〔宮田院〕今日かゝへし。新案もの。

ト丹下と見て思ひうて。

てゝ。ど幸ひ。

ト雷内と敬礼合せ。

警視氏おたゝへ案る。

トづかゝとゆきうける。

看不慣三字。後段為伊賀局殺賊。不知其為何人線索。

小人争功情状。任力寫出。反不見痕跡。

〔雷内〕アヽイヤ千島どの。かへさぐも只今の一義。ぶぜ拙者ふ
お任せあを。

〔宮田院〕いのうも。承知いゝて。ほ生る。

〔雷内〕然らばいよゝ。ほ知とあ。

〔宮田院〕武士の言葉ま。二言いほせらぬ。

〔雷内〕どうやら心ま。

〔宮田院〕ヤ。

〔雷内〕あゝとおとゞぼと。

〔両人〕つゞゝ申さ。

ト是の鳴物まて。宮田院よろゝ思合ろて。丹下付て上手
へ入る。跡合方。

梅枝情事。不始於此只此一句便見。

〔番四〕多田の院が今の様ぶり。何とも以て心がゝりわきて出しぬきひとりして。事と成んも計られぞ。破きとゝぬ其先ふまん計略が有りそふふまの。

ト向ふを見て。

ムゝあまへ来るゝ。中程まで弁の内侍ふ仕へ女。ふまふまたら

○ムゝ。

トきつと思入レ。早き合方にて平内早足ふ上手の奥へ入る。山おろし合方ふ成り。向ふより侍女梅ヶ枝さげ髪かぶら。古代の衣装ちゐさき包ヲ持出て来り。花道へ。

〔梅ヶ枝〕いつもの様ふ計なが。あそこらに居てトさんも

老僕於此始見。一篇文字以老僕為結。反如不經意者乃好。

〔番六〕コレ娘。

ト梅ヶ枝うつかり。上手の奥を見て居る。

コレ娘。

ト脇中をたゝく。是にて梅ヶ枝びつくりする。

何として居るのじや。

〔梅ヶ枝〕お前いとゝさん。びつくりしさふなナア。

〔番六〕何も其中うふ。びつくりする事がるものでそうしてな

りやふんが。どうぞふふ逢ひたふものじや。

ト此間拍子にて本舞台へ来る。上手へ見返で頻ふうなづく事ふふゝく有。下手の奥より。横京の老僕安達左衛門髪かづらキリワラ。胴抜小袴一本指にて出て来り。

ふいどこへゆきやる。

〔梅ヶ枝〕アノ、そふい急ぎのもてぎこのと和まれまして。とて
さん一すいろて来ませぐ。

ト由ふとたる。

〔爰六〕アヽコレまちや。ゆ〜そふこよ性〜ぐある。マアけ〜へ
来や。

〔梅ヶ枝〕まぐも急ぎの和とものの和。一すわ〜しやいろて来ま
も。

〔爰六〕ぐふでも有ふ用ゲ有。マアけ〜へ来ひといふよ。
トきろといふ。

〔梅ヶ枝〕ハーイ。

ト梅ヶ枝ふせうぐ爰六のそばへ来り。両人捨石よ腰をか
ゆる。

〔爰六〕そろ〜てそのもてぎこのいどなこの和みどや。

〔梅ヶ枝〕ハイアノコレハ里見ら。イヽエアノ須田なよ和れま
たろんナア。

〔爰六〕須田なの。ぢ陣わあら。是より北へとろてゆ〜そぐどや
が。

〔梅ヶ枝〕エヽ。

〔爰六〕ヨとりや親ようを和をつ〜ふ。

〔梅ヶ枝〕イエく。ぐふでいは生んせぬ。ふいは市所内よ来て
居まぐ。結愛いとどけて呉との事が。までおちへ来うのぢや

の引ナア。

〔義ら〕ふんとーやゆうそいくと。安後橋まぬ云葉のやうす。ろり
や未ざ心ぐ直らぬふコレ世間世親父がくまぐいふて閉せ
た事。よもや忘れいせまひがな。

ト合方きろぢりとふる。

改りていふでいふそれども。もとおれい河内の國。赤坂在の
百姓で。正成公より召出さる。何の世用もたらぬそのと。只正
真ふこのと有て。正行様のおかい後極おちれさい舟分から。
ぢひよ〜とおつ〜やて。ヤ〜もそばとおきふ〜ふさらず。主
淀やら友達やらろのうちぬやうにおなでみ申〜。ろふぐ此吉
野まぐお供〜。おれいふかく家をたくり名夕上りて

後段伏業。

梅枝固是。内侍使
嬶。於此處叙出。

内侍公そふふい弟の内侍様〜お宮住〜よ上〜てから用ね
い。と送ろ其内ま。先帝まい崩御まし〜。宮方い次第まおとろ〜。
故い日後ま威勢つよく。いつあん舟此世所〜。押寄せて来よ
ふ。知ねばお上とゆめ宮方ぢい。敵の用とあろぬほん配
所苦労あさる世中で。有ふ事ろそあしよい。男ど様の世家来
の主計ぢ〜と不義徒ら吾ひうちいろうちの事といく〜どき
びーひ軍令法度と犯せば重罪由〜。死刑いのがれぬ二人ら
ざ身の上。それといそぎま内侍様がそなるさま嘆をトされ〜
い。お情ま世ろるお計ら〜ひ恩と俺まいつまでも。阿僧が浦の
家来ら事顕形〜其舟い。大ずま思ふこ計ぢのお余まかく〜こ
る事。あふ〜と大事と思ふなら。世間もいふた通りふつつり思

ひ切て去まや。そうなる時い是迄の。てゝの身の忠義も水くふ
りそゝ。ゝ田へ。此親迄どの面ばげて人様よ。顔向けゞならぬ
ふと思ふ。いかよ年が出ぬといふて。是程の迄程がつゝらぬ。見ゞゲたくゝおのれハナア。
トうをひの思へうゝ異見をる。梅ヶ枝ぶつと思へうゝ
て。

〔梅ヶ枝〕とゝさんかんゝてやさんせつくゝがつゝふ迄
せんゝ。今おまくゝの心ふ事いふきゝとけて居る極よ。
うゝ改て奉てやさんせ。計ばりも必ゝとて。け
ふはそふつり二人が中い。てゝのれる事やゝてある故。ふで
安心ゝてやさんせや。

老人語氣自繁繁
却見其溺愛。

〔家ヒ〕イヤゝどやおれい呑込ぬ。それいそなたの一才のが
をまゝる又おまよ思ひ切ゝ。おれと一処よ内へ帰れ。
〔梅ヶ枝〕それどやといふて。今日い急ぎの面相を持て居ます。
一才とゞけて点よ内へかへる程ふ先へいつて待て居て下
さんせ。直ぐ行のら内へゆき。ふどらちくも出りどふ居る
のが。てゝのそくゝといふ中ゝこでさんせいハナア。
〔家ヒ〕あゝ極。ま極よいふ事ならさくゝ帰つて待て居ようと
へ。
〔梅ヶ枝〕さゞよ行のらかへるいハナア。
〔家ヒ〕そんならおれい。一足さきゝ出ようあとゝくり。
〔梅ヶ枝〕工。

不得不留一句。不
然這箇老人。豈不
耄甚。何以有末段

奮勇氣象。

（義六）娘活て死るぞよ。

ト山おろしはあり。義六よろ〳〵思入て下手へ入る。

梅ヶ枝ハを見送りて。

（梅ヶ枝）コリヤマア困つた事ふかつて来たわいなア。

ト よろ〳〵思入ふまめきくる合方ふふる。上手の門の内より渋川主計出刀キリ。胴抜小袴附太刀を腰そ出て来る。

（主計）梅ヶ枝。

（梅ヶ枝）ヤ主計さん逢ふはせんしたなアー。

（主計）我ともあくさよ逢てくれ。先刻是へ来合せて。義六殿が。あいと事どうけたなるそ。へ異人。出るは出られぬ門内

此一句。省却多少言語。

ふ義理の板子と同て死ぬるぞ。

（梅ヶ枝）とゝさんが今の異見。ゆるもみぐときゝうけれども。ふしぎうけるおまへの事。思ひ切られぬるこゝの因果。どうしたらよふはせんせふ。

（主計）一日逢ねば千秋の思ひ。これも同じ事かゝる射芳の最中まで。女は魂奪いるゝ。武士の身はいかるまでもきゝ不業と知るが。いく度も心で心を戒むれど。思ひ切られぬ心の煩悩と いつてもの迷ぬ所ハ。君へ忠を祖へ不孝。

（梅ヶ枝）もしも主計さん。

（主計）コリヤあんとしたら。

（義人）よからうナア。

一頓折。

ト両人よろ〳〵思ひ入有。

〔梅ケ枝〕そも〳〵主計さん。さう考へて計りおぎとけふのつゞまるつゝが身の上。よりは思案して下さんせいナア。

〔主計〕今後に成のいとそ〳〵。いちく元亟の道理弥亟ぶ霧尽ふさば。去ず主人の法の上すもかゝらる仕義ぐふ思ひ直して。もの乱るまり分。思案いふひとへ。

〔梅ケ枝〕そんふらおあいとうとが。今更見捨るゝのひナア。

〔主計〕あんの居更見捨るどゝ。今もそなるまゝふ通り。思ひそめていまりくまろれるゝいさらくふ切るふ切らぬ煩悩の。きづふとなつとおとの為ぬおれい思ひ切て居る程よそふさも思ひ切てくりやれ。

〔梅ケ枝〕ソリヤ情あるゝ計さん。親のゝとをふ肯しくもつるゝ。やそのれるんいけさんせぬ。そんふ事いるぞとまゝ思案古て下さんせ。

ト主計どつとうつむいてゐる。

そも〳〵主計さんどうど思案して下さんせ。ヤレ〳〵是程ふふる因事のふひゝどうでもいやふあつるのういナア。今さらおまくよ捨られて。そゝうゝお身いあんとせふ所詮そゝれぬ事ふまびそうじや。

ト主計のホカつをとかけるゝ計ゝれとゝめて。

〔主計〕是ゝ又経亟ふ万。早まつる事ぞまんぞ。

〔梅ケ枝〕けふゝして。殺して下さんせ。

〔主計〕どふしてもれぐさをれさうぞ。しゅうとめのはち蕾ふ。死ろ心う知らねどもの。大恩ある義父母へそむく。不孝ふ者ならうぐや。

〔梅ヶ枝〕たとへ不孝ふふらうとも。おまへはまつの上て何ものしみりこうやいきてい居やぬまいナア。

〔主計〕トなくうと計ぢつと思入りて。

〔主計〕夫程までふ此主計と。

〔梅ヶ枝〕わるの間男でいたをるんナア。

〔主計〕か弱ふ暮ふてくるとるものとぶんと是ぢ捨られやうい。

〔梅ヶ枝〕ヱ、そんならうこの殺ひをば。

〔主計〕叶はへひでふんこせふ。

〔梅ヶ枝〕うれしう存ぜんをといいつ。今の二人りが身の上よ以思巣ぢ存ぜんをうつ。

〔主計〕外の思巣もふけをども是より二人り愛を生ちのき弓矢を捨て生民となり。山野の住居とーてふりこ。おあこと二人りくくを所存。

〔梅ヶ枝〕我うつふ事ふ。ふーふるふつれてのいて下さんせ。そうーて二人りが行く先い。

〔主計〕どーといつてあそいなかれど。爰ふ居れぬ互の身の上。思へば是ぢ。大恩とうけ。主人とよそふなり。此身を退く不忠不義。

無所往乃。所以為間諜。

只是在頃刻。

〔梅ヶ枝〕内侍殿のおぼしめしを。俄に此御身とかくせで。おらん人へ不忠。親へ不孝。

〔主計〕歌とおそれてゐげのくれ。猶ぬけ武士とてらひ。

〔梅ヶ枝〕さぞや詠まてとてさんが。くはやつめとお後生。

〔主計〕其天罰のむくひ来て。

〔梅ヶ枝〕頓てうき目ど見る事も。

〔主計〕知りつ。犯と身の大罪。

〔梅ヶ枝〕切るふ切られぬ二人ゞ悪縁。

〔主計〕思へばさかおひ。

〔両人〕身の上ぢやナア。

両人今説忠孝自然節奏。

〔主計〕不義と犯せ。不忠の大罪。

〔梅ヶ枝〕親まをむくる不孝のつみ。

〔主計〕おゆるし。成て。

〔女人〕下さりませ。

〔主計〕人目まかゝらぬ内は。

〔梅ヶ枝〕おゝもあふ。

〔主計〕サア来やれ。

両人をと取り引きかけ。上段上手の奥より。以前の姿野出て来り。

行在自有行在摸様不是艸々検非違使句著眼

〔平内〕不義の両人をさいなむぞ〜ぞ。

トぞ〜つと笑ひつゝ出るなくびつくり。

〔主計〕ヤ、あるひは驚野。

〔梅ヶ枝〕時京なる。

〔平内〕かゝる好者も弁へずく不義をけさらくふ面きりの我

目よりかゝる上のらいとのがしよいお成らぬ。豆よりなよ海

らぬ人検非違使の官人へ引渡しきつと軍令正さまやあらぬ。

〔主計〕ハ、。かゝ古目よとまる上からい。今さぶたなるよと身のい

ひつけ。申解くべき主家とていはいぞめ母すも我くまんい。

いゝ成る手きき刑罰ものいるゝを生身のさび。

〔梅ヶ枝〕軍令犯せし不義の咎さゝで命とめさるゝもさゝ

罪止其身不敢軽々為他人間諜獨奈連累主人逼来為之自有此等情實

〔主計〕口信ぶきい。検非違使のよい渡る其附い我〜ぞがりか

覚へおきさらんゝ稜也が身の上すゝ。かゝ也いつらおる童で

の軍令の未ゝ人の身の上ゝ。かゝるる事のゝれおきやう。

〔梅ヶ枝〕どうぞ〜二人りを生埋まてあなされおをかけられて。

〔主計〕市城ぞんを逃がされゝ人の身の上てがおきやう。ゝ

矢の道の市なきけ。

〔梅ヶ枝〕どふぞお慈悲は時京なる。

〔ゝ計〕偏へお願ひ。

〔あ人〕上げれる。

〔平内〕ム、ハ、。汝ら不義をけさらくからい事ゝれゝ其附い。

ゑ人の分ゐかゝつゝる事い。素より覚知で落しゝる死。今さら何極ヤそふゝも。軍法い破られぬ。

〔主計〕スリヤいつのやうゐ死ひゝーてゝ。

〔平内〕所てゝ人のゝ税の助ゝ。多分い切腹致ゝそふ。

〔主計〕ヨ、我ゝが科よりーて。何ほど存おきたる主人ゐ。

〔梅枝〕古切腹とさゝゝせねば。ならぬ事ゐあつゝるゝ。

〔主計〕コリヤもふいつそ。ム、。

〔平内〕ヤ、大罪犯せゝ身とゐつて。私ーゐ死とゞんゐんゞゝ。叶ゝゐ事ゞ。

〔主計〕スリヤ。どふあつても法傍ゐへ。

〔平内〕是より陣所ゝ引立ゆき。二人りい素より統ゝ逸ゝ。軍法通りふ沉ひゝられる。サア身と一処ゐあゐみおれ。

〔ゝ計〕めゞりもゐき小車の。

〔梅枝〕ひくゐまひゝ也ぬ。

〔ゝ計〕絶たる絶命。

〔平内〕其分ゐ重き罷器ゝ。奥ゝあぎゞ水だゝゝる。

〔ゝ計〕なんとおつゝゆる。

〔平内〕身共ゞ陣所へ。

ト申さゝゝく云て。敵ゝ合一寸余と人ゝるゝ。其このゝの長ゝせ。きりゝくゝうせふ。

ト平内きりつとなる。奥人是非おきこゝ。ほゝゆう山おろし金方ゐて。道具まゐる。

時景以梅枝為間諜事首得好只此一句全身呈露一張一弛操縱自在

賢女爲國談胸襟

本殿三間の石中堂の二重素体。三方打まきして捨皮葺の庇掾側に欄付金襖の古びたる中門。上の方一石奥へ下げて。續き素体。同じく庇掾側に欄付。古びたる庇簾を下げ。下より二尺の廊下口。上の方大樹の立木まで見切り。下北方破れる網代垣。樹木のあらひよるべく。同じく立木まで見切り。此道具皇太の模様。一切ふるびて拍子びたるてゐる。此へあり。さべて皇太内侍の内侍書司のてい。

「爰に二重の上の方る弁の内侍さげ髪うづら白袖ふうち茜緋の袴すて袴を座し。古今集とよみ為る。二重の下より伊勢の局さげ髪かづら白小袖緋の袴まで。長刀の身をふき為る。

把古歌来。做笛冒頭。妹脊二字主眼。

語中自有荒涼凄惨之意。此是一篇詠懐賦。

もとより遠く笛の音をかなめたり。此へ合方まうづら小出笛とあしらひ道具とまる。

〔糸内法〕流をていへ。いもせの山の中をおつる。よしの川のよしや世の中。貫之紀ほどらまれ。昔しいもせの中をおほるる水。今い都のかよひ路の中をつたつる吉野川かふる深山の仮宮ようきい家まむ木ごらしの風も強うと怒られ。使りまきくい俗世道の外をいあるよの方傍さへ。ふく。虫の音と友とていてあふ田舎おき皇太の有さま。

〔伊勢面〕月卿雲客の人くも。雲の上とい名のみうて。ちかう雨もふせぎかねたけの延のおきあしよ。所をふれぬ物のてざ。彼の方と詠めていい。昔しいしい。回うしき懐旧の情を扶といい。

たまひ。

〔弟内侍〕紅葉木の下岩根よりいでて清水と結び渇を凌ぎ。ひまなく砌ていくらよ。たゞ九霄の雲と望み。

〔伊賀局〕時を待宿の秋はいかゞ。ひゞく遠寺の鐘。

〔弟内侍〕是非もなき世の。

〔妻人〕ありさまゞやナア。

ト両人よろ〳〵体のせりふの内。伊賀の局の長刀の刃と

かきさやをとりけて〳〵押やる事有。

〔伊賀局〕内侍殿。げふ〳〵お土のおひけもよくぢふ〳〵所まで少

〳〵なと。お京とおぐさみ遊。まゼ世ゞ世の時で有るから

同志相恤義見乎
言。是豈尋常婦子。

謙遜辞譲自見其
性情

あ〳〵ど多くの人まかづうせ蘭者の業りかそのの中より被の

風さんいとふ内ゞ。かゝるいぶせき仮宿。されも有ると

ぬ深山の内住ひ。さぞお業うつよ内中りまふ。

〔弟内侍〕さらいまりいかそおさおそ上おき君まお仕へ中おそ。

身の果報い有おゞら。女房といふも名のみまて。経屋よ荘て

い侍女同様。物の手ぶ。いとらぶぞよ。さらいと思そ。ふるそ

なふの深切。忘れもおう。ぬうれ〳〵おぞ。

〔伊賀局〕内侍殿そ〳〵る事ゞ。後まつ〳〵其おこ玄素内存の通りと

らとゞ身い石山寺のかさほくり。母と二人りで世を忍び。物

ゞ仕やよ岩ぶれて。埋れ果る身の上と。隆資公よ召し出され。

おほけふくも宮仕へ。ぶれぬ雲井の式令節会あゝさのおか

げでやうく〜いとゞ女官の内よりかをまゐらる。御身おくりの方
より一ぢんぞ法心おかをぞよ。おつゝひらかれてをまゐませ。

〔糸内侍〕其ゆうよりいやれども。もとおもふの身にたれ有ふ。
左中将義貞の御内にて武事をぞれしまをら狐と。せよ
ひゞきをる藤原伊賀の夏の姫おをぶ。御宮仕つよ何ほらぬ
氏宗性疎よ長刀兵法も武士よ勝る事力武藝をる宮と
指ゐのら卑しき勝のわざまでも。いぶふ心の無きと知る。心
の内ぞ思ひゆられてをまらぬふのう。

〔伊賀局〕ナンノマア。その中ゐ法んきひよ及びまーゆうぞ。
久〜く深山の住居をおせば。おのぢとおれし賤のよわぢ。何
しも思ひい殺〜ゐまねど。あおらを法ふる古中弁俊基朝臣の

語氣温順。自然有命婦氣象。

末一句是著眼。極有力量。是女丈夫口氣。

法息女よて。ゆがとおきを法身ふりおぐら。世代といいひおが
ら。ほ弱女の法不自由御門の為めよ法ふをおを〜ゐ法
法事労お蔡しゐ中上げゆる。

〔弁内侍〕甚辛労ぞ法身ぞろうる。皇后皇妃の法身ぞきく。扶の
目をあるゐぬ法心遣ひ。是といふのを彩家の法運変よかゝむ
く時ゐるう。かぞいていれいを十九年。我父俊基朝臣よい執権
小條宮時ぞ暴逆と対亡〜叡慮を安めをらんとゐ成〜ゐも
果ぞ〜ゐて。むぞんの及ま世と去りゆひ。ほ波新田楠の忠臣
出て。宮時と対亡〜一度君の法世とおし。父が忠義い貴〜ぞ。
又ゆや械法宮氏ぞ逆恵の為めよせをゆられ。ゆは是成ゆ
の山よ。とづゐよ皇恵をなをゐ。

漸入厳境。一場慷慨悲憤。不流麁暴。自是文流語氣。

篠塚去。不呼之。之故云。

内侍一味温柔中。自有慷慨意。局一肚勇烈。自有含蓄摸稜。一雙美人。兩様美質。

〔伊賀局〕正成を始めとし。義貞を無念の由最期とげるひ。父はそ伊賀局伊賀も出ていかく云い白波の。跡とふそべいもふき世とふり〳〵い皆反賊氏が為せるわざ。

〔弟内侍〕いらでこれとい思つども。かよわき女の業〳〵さい。打捨てうて出るうもも出られぬ軍議の座いはらあかさんふらぬはあのふがひあるを。

〔伊賀局〕今は後の日を送らい。忠義と思ふ人こも。なまよ城の中ふ降り。日ふ増しせまる勅家の威行の卒錢を討ち歩づめ。

〔弟内侍〕女子同士でかうふとも。不埒及ぬて下の大事。童戯遊を安んじ給らんと。思ふよ甲斐ふき女の身。てうらいが心中ふ。稀〳〵て冷ぞいいざかい。寒い天下比豪傑よ出分とすかせて国と伝び。内外ともよ力と合せ。思ふ忠義と貫ぬかんとふを。渡して居るるんのう。

〔伊賀局〕ようふと合もそのお国ぐらいを忠義と。勇将よ縁と求めてかきたのみ。是さんこのよ重てより。思ひ定めし心の操。

〔弟内侍〕そんならをあるも生心。そうとい知らずそふ中とも。いつもぞかたらぬ互の心。

〔伊賀局〕あ〳〵てうえれをあ解さうも。思ひい国と共義の道。

〔弟内侍〕女なのらも身を粉ふして。

〔伊賀局〕かさむく時代とうりゆど〳〵。

〔弟内侍〕再び再びくうどん華の。

至此吐出心腸。語不絮繁反好。

悲壯慘澹與打蕉破蕉相映帶有一段光景。

伊勢守　花咲き春い歌へども。

弟内侍　ちるまでの末とおもふらんとき。

伊勢守　かゝ沈い量て悠遊の。

弟内侍　ちまゝふさらす互のかゞね。

伊勢守　六畳の山の雪雲と。

弟内侍　ちいふくきかゝるかの赤の果。

伊勢守　それで家運の至れる財産。

弟内侍　歎みなき世の

侍女　ありのきゝやすア。

ト侍女憂ひの大息しよるゝく有。下手の御下口より侍女一人出て来り。

與前面藤六語相應不編一錄

侍女　内侍様へ申上げまゝ。二位様の北の方の侍女ひとゝて。

ゝ様は暇おなりもゝる。梅ヶ枝がお気毒と相系いゝ。内目通りと歎ひもるゞ。いゝのゞ斗ひもふや。

弟内侍　ナニ。二階堂の叔母上よりのお使よ。梅ヶ枝が来ゝ

ゝや。ゝ様は嬉い事いたかれど。ゝよ花ぶきあの梅ヶ枝。殊よ常と

ゝゝ。思ひもせ一叔母上のお使ひとあれい。苦ゝふ

ゝ是へ通ふゝや。

侍女　畏り市ゝ。

ト侍女もとの御下口へとゆる。

弟内侍　暇をあゝへゝ。使ひもきうぬ梅ヶ枝が。二階堂

ゝまゝ叔母上よ。おつゝへゝて居ゆうとゆ。

梅枝為間諜實出不得已此一句寫出左思右想光景。妙極。

〔梅ヶ枝〕お嘸といつてきてより。今い者國言市郎二階堂よりまつまをこ伝左の北の方ふ左を公といつてゐる。

〔弟内侍〕ヲヽそれで有さう。シテ叔母上もおかつりいあらざるゝ

〔梅ヶ枝〕ハヽ

トうなだれて居る

〔弟内侍〕コレそのいつてねいるねが知れぬ。叔母上よりはそのなくてさらせのふう。ふ様子をきうせイたと。

〔梅ヶ枝〕番頭の手い左おみよ。くるーう出て左居りまる。

トみ弟を出と伊奴局とつゝぐ円侍へ渡を円侍封ど切りあと出して

語氣婉柔。與嚮語自別。見婦人至性。

〔弟内侍〕ハテ心得ぬ。余人のお訪。

トいあらぬ思入りて。みをひらきよむ毎ゝ驚きうれひのヲヽ。ほ文のやうりてい。叔母上よりは様よりふ左いふつきふていふいとも。あつ。いくおおいまもよう。梅ヶ枝左ほりさ。ふいふいあつや。

〔梅ヶ枝〕そのおみしも。くるーう出て左陸り本るまぐ。左病家よおあり様ーてよう。月よ塔ー左様ふるるく。左四みりいお食もまくまぐ。左大切ふ左様子よ左はり本る。

〔弟内侍〕エヽ。まを様の左ありさ。とやうみの文上母上よりは思も暗らぐ。おるるりれヤーたようる思ふい叔母上ひとり。セ

哀痛悲惻。妙動人心。

古歌、いたはりていとおもひ、ものもまゐらぬ。お教をえねむらしさらおぼつかしきものをと。思ひぬ日とていたなきものを。思ひ絶の白いとつきよ。あらせのふもゝ露ならず。お例よ身をふ事きへも。仏よまゐせぬ仕への身。幸おきあの我身ゝやナア。

トよろ〳〵うれひの思ひ。

〔伊勢写〕四侍臣常〳〵臣桑ひ遊び〳〵ぶの子の臣大病。さぞ吾分で臣生り本ふ。お寄〳〵中上る。

〔梅ヶ枝〕臣主公上り本てよりお仍る臣つく〳〵やうちも。四位全のお當斗りたゞあつら〳〵思ひて。私夕のおりのがて。弥夜とその臣大病なつさ一ト目遊てひと。其るなろう。伊

てゞ臣生り本る。もさやふ何をうも。私のみをくあひ。みありさ風よ臣生り本る。

〔糸内位〕う〳〵きく上いがさ〳〵ときもうち控てられぬ今わのきゝ。さやくお上へお乳ひ中。今春立臣嘱のそろ。せめてい一と歌お仍るて。臣みとり中上ぐふ。コレ梅ヶ枝。それさいまふきゝ〳〵かへり。臣上を中をふるゝ。上よりお嘱のいろバ。立ま跡より参り本るとふ叔母上まゆ〳〵てたもや。

ト女第を出と。伊契の句とりつぎて。梅ヶ枝よ涙を。梅ヶ枝

文立て。

〔梅ヶ枝〕畏り本て臣座り本る。は事中上げ本さら。さぞおよろ。いびよ臣座り本ふ。左程お迷べ。私ハ。おやお嘱殺し本る。

〔奈内信〕ヲヽ、大義で有る。

〔梅ヶ枝〕ハヽア。

ト合方まて。梅ヶ枝式様にてよろしくてよへを入る。乃内侍業平ひの思ひのよろしく。

〔奈内信〕是より直ぐお上へ往て。今青一ト歌のお勝とお願ヤて来やふこいのう。

〔侍奴与〕こちらもそのまゝぐ立つきやさん。

〔奈内信〕ゆーもおふ由きまふ。

ト琴唄よ成り。両人立上り。ちとやかよ奥へをへる。唄切れる。姫の達風の音よ成り。下手の立樹の蔭より。以前の横山丹下。高帽子よ霞面思びのきゝらへきろしく。力と常て

出て来りあらうと伺ひ。

〔丹下〕市五人へのを公照めるて出きりのつゝぬうちと。家までい思びのしがまぐ等るふいよろわど間もあり。〇ムヽ。

ト丹下よろしく様の下へ思ふ。ちせる付風の言ふて。出道具すはる。

本舞屋ゆし上へおせく。二畳常足の二重承体。二方杉まいして茅葺の庇。同しく九本の極側出中まらつぬぎの石。

匂ふ古びまる庭戸上の方奥へ下けて。一畳のつぎ承体。

因相まど。下手三人の廊下口つゞいてふるき障子の袖と

見せ。上の方樹木をあしらひ。古びまる障子よて見切り。下

の方同影。匂よ山〻遠りの書ふり。吉野山農のもやりもぐ

て柿こぶ色なの縅。
えぼし二重の上の方。柿こぶ色帽子縅金小刀を持しん
をよむりひ。兵書をつゝみたる。うしろ方かけへ太刀と
かけ。弦巻へ弦をかざり。箙弓矢等よろしくたてかけ。
村の強。今方小風の旁をかさめて道具とする。

議論醇正言不過激真是儒將氣象

【ロ】傳へきく。庵の玄宗い安孫山が謀叛よりその身と巴
蜀を避。まのひ。又我狩の浮見系のさめらぎい。近江の勢迫ふ
襲ハれて。此去壮山も隱れのふ皆ひ剃上の患ふして。一家天
下の怒とあるされども。彼ハ心を欲しがるとく。彼ハ聖主の
德化を帰。是天道の恢理なり。殊ハ妾今穏昏叡智ふまく。
留の昭廷皇帝が英略すもおさ〳〵おとりかへねバ。再びかへと

伊賀局佳婚早既来此

君が代なりとの時ふうぐきといい思へども衆寡てき
せぬよき計畧。ハテム、。
トよろしく思へ。下子の御下口より。御宮一人小具足して
出て来る。
【ハ】ハッヤ上てを。只今ハ本国より。何ぞ密この間として。
系正儀様ハ出る所出なり本る。
【正】ナニ正儀が系かいとや。
ト不審の思へよろしく。
是へと申せ。
【ホ】ハッ。
トいろ〳〵てもみる。

此一句。占正儀身分。

兩心相照。以見兄弟相愛。

言出意外。故媚。

〔正儀〕彼は早の家。大切の家どかろ〳〵しくうつよ出るかものあらず。城と離れて遥〳〵と是に来るへん得ど。定めて子孫のろう事あらん。

〔正行〕ト合方ふり。下手の廊下口より。楠小次郎正儀。烏帽子裃。ち垂ち。刀をたばさみて出て来り下手へ出る。

〔正儀〕やつぱり〳〵やこ公儀乱れたる世の習ひとて。常ものあひてるる事おはせべ。互に公儀思ふのみ。まづい後もかろるる事。重〳〵〳〵。

〔正儀〕この上ちを出かろうかくうるとしきに成ることなり。

〔正行〕大義ご極ご存じ奉る。

〔正行〕シテ母上拝来尼公ものかろらせの小事いふきや。

〔正儀〕母上〳〵も出ちとやうまて。異儀あるお渡りふ出はり本る。

〔正行〕夫い何より上ろうおぞ。何のいさて置其方ぶ様と経れて遥〳〵と。共壁まで来りい。定めくる孫の有事ぶらん。是よ

〔正儀〕其是〳〵衆りしい孫の義ぶ。今一度あの上の方敬をおい。今生の方暇乞をやさん為め。母上とひそらぶはのり是ぶ。

〔正行〕ナニ今生の暇乞とぶ。シテ其子孫い。

〔正儀〕只今申のぶるで出度り本る。

ト母上の入り孫への合方

出羽守このかみ山時之とくふるしもふ。業作在ハ出越ハ有ハよ
か。諸國の官軍多く集り再び新家の威勢をふるひ。賊軍忠也
志ゞ攻おしもたのかみ小勢を以て之よあたり。百戰百勝の
功と奏しまく。賊主弓氏おちおそれ。暫く軍サを止るふ至
る。既ニ五百井寺のたゝりひすゝ佳吉の合戰ニ賊の兵絲
直頭氏ゲ撓とひ中。賊軍都へ逃のくりしと進よより家
いれり。サレ氏弗振の弓氏。出羽ニ引むゞ可きふらず。其づゝ、
賊軍の暴動を察ハ。今弓氏の恐ろく。ものい偽ニ横家
の一族のみ。其餘の諸將ハ逆くニ。或い戰死ハ。或い降り。新家
ニ忠ふがふかの共い。日増ニ人數減おして賊徒いよ〳〵多
人數加ふ。勢ひ破竹の如くおして。遠からぬ内大舉ふ是

層々説入。無可奈何。有波瀾。有抑揚。

成吉盛ハ攻寄んぞふ。時家ハ衆ニ欲しかたく。このかみハ
成謀略ありしとも。施ふあるべうらゞ其節ふ至りていハ捕一
家の手熱をまとめ。一舉ニ事を決しかん。

（四行）ヤ。

（四行）さある時ふいらの上ハ。ハ討死の古覺悟と。某推しな
きバ。これ今生のたゝりのれ。今一度ハ敵を見まゝ〳〵存る故。
近ハ。めゝしき事ふ。ら。接戰して生産り本る。

（四行）さとがハ弟。ほ山行ゞ狩狩と続ニかけて。えるぬく。かく
る思童あふ其方ゞ。大切ふ本國の守りを疑れ。ふ。くと也
吉野手ゞハ来ハしゞ。欲ふ京虚とおそ。れふゞ。かく。き大
事ニ及ふ。其財汝ハ如何ハ。

一緊一慢。毫髮無間。

常山蛇勢。正儀知兵如此。

〔正儀〕其儀は付てハ。思寄ふ〳〵てうかつは居城を明け申さんや。某故の騒動とぞ。今赤坂を攻る時いたの上去程て討て出て。さ〳〵たさんで攻めらるゝもの。其方氏の恐る〳〵処。容易は河内へ軍勢どさ〳〵むくる事ならず。たゞ心は加りたきの上の庄右の上と存る故。母上とひそかに斗り。和田正武は藤子とさゞけ。赤坂城を守らしめ。去程に使者を立らと〳〵いり。十四五人の所等は新交城をぬけ出間道より。是まで来上致して庄屋りある。

〔正行〕ホヽヲあつぱれ有る後ぞ智略其才幹と見る上い。正行討死ホとても。ゆるて君と守護ホもの其方ならば。家業ひホ。欲て大軍寄せ来らば勝負と時の一戦は後。花ぐし く一戦なるん。

〔正儀〕其庄後心と存る故。つきゞく来上致せ〳〵ホり。去ながら唯兵義ホ球死ホ後しかゝ仏説ぞ。柳く義時諸国の武士ども。其氏ホ奉ずるん彼まは忠義とあぞる有らば。のれが威勢とかりそめは。已れが邪を遂んとむるかみ。れがそのん全く盗賊の不業ホれだ。今四五年ぞ過ぎて。宮上扶等と結めしい。各私孔場長。雄載不和の内乱と生ぜん事物なし。民屋ホのりて攻討かゞ。去ぞ来一の良策ホらず。去の上の庄賢寅ホ何ホ庄屋りホ。

〔正行〕つゝふと合を没ぐ実兄。いつまも数年の時日と活さば。賊軍は内乱の生ぜん事。これも疾けり見ぬきたり。

数年時日四字是所以不可待。

亦是一策。

斟酌較量。出萬不得已之一計。英雄苦心。是吐露肺肝語。

〔正儀〕左極は先づ一おとこ。ふぞろ。財の多くも待ありでたくびの軍サは討死と。ほんと宣められしー。正儀更はんと海ぞ。の放まらたの上まん。只討死といそぎうしゃ。ぴー。忠義の為ぞ。無益は一命捨ふ。思直ふき事うん。ぜいまや。

〔正儀〕汝の妻子一わさりいとわりあれど。是まで深きる恩あり。正儀生涯よくくーて。中こそとれば病は侵され。年つきに枕は朽ちて。多くされば神仏日ゝ衰へ。今より数年は生命を保ちんも。果未あし。迚も死べき命ぞ。あいま戦場は屍を曝し。あまねく天下は示しなば。諸國はひそむ忠臣士たれが為は義氣を振ひ。正儀一人死をとゝふとも。百万人か忠臣からたれ。恢復の功を奏ぞー。女わらべは仇せら

ま。庭の床は死ちらいん。いくいか塔をよ。あらん又二ッ。ゐい敵の大軍はせきー。財我小勢をかつく半角の傷負為しがさし。我れ多勢を引ゐ。まつくらにつくあらむ。大勢を討取らん。さらざふのれと刺ちぐ。その場はこの矛ら死ちといふ。味方その機は乗ぞるあらばなどう勝利と得ぎらんや。是我死と変せーとるあるど。兵仏ぞ。ゐ変せり。後の事は後は番ぬる。再び涙むる事なれ。

〔正儀〕ハ、かく正成仏有る上。正儀のとゝ中上べき。今ゝ大軍攻寄せかば。思のまくは一戦あれ。第一大の上討死あらで。其時ぞ。ゐ其志叛る立て。財機と暴り。皇居と安楽は中産しまれで。仏あ思ぞよ。

〔正行〕とれしてこれも仁安一いうあもび。書今まい聖文かし
たくさ一すせど。決才ふかさぶく財運の未。
〔正儀〕今ハ法國の皮事も遥米芸氏の手屬し。
〔正行〕古十余ぬ大方ハ。賊軍あらざる処もあく。
〔正儀〕吉水院の山房と伊の皇孫とふ一のひ。
〔正行〕つぎくらお思らを天が下。
〔正儀〕世のうき雲を吹拂ひ。
〔正行〕再び君の正ひかり。
〔正儀〕かゝやく財の光のろ可き。
〔正行〕見よく今ふ芸氏足者。
〔正儀〕名家よそむく反賊ども。

〔正行〕松て天罰。
〔正儀〕思ひもらさん。
ト財の種とおゆみ。
〔正行〕実よ冬の日の芸宇く。もそやたそがれ。
ト正行ふるちとあらを。廊下ロまり以前の部ろ出て。
〔郎等〕ハツ正国ま正座り本るろ。
〔正行〕芸おハ思し禁ふる。陸ふく。と見きふり本せ。ふ馬と引
きく用をいて。
ト御字廊下ロ。こえ入る。
〔正行〕も松てのちおど帰法ふし。今青い歌とく。も風雅のひらき。
田ろく互ひの名跡を惜ん。

〔正儀〕其とそもかいあう。本國、主殺さい。今青一ト秋ゞ足米の。長きさろれまくみかつも。

〔正行〕其盃の殿よりもめぐりいかあき光陰の。

〔正儀〕おーみてかゆかおーまろい。

〔正行〕弓矢とる身の。

ト女人殺をん合せるを。道具かゝりのちゝせ。

〔女人〕おまれじゃナア。

ト法ゆゑうゝく。時の錦袋方より道具回る。

本舞臺通言豆の二重。橋ゝぶきのひさゝ言欄付樣の下と一面まえ也。長廊下のまゆう。上の方一面のつぐき座体。同じく言欄付。あへ内義と下け打回ゝて白木の遣戸明け立ある。下の方同じく遣戸ゝそえ切り。平舞臺。上の方大樹の立木まて尺切り。下の方立樹人の登ろまる。上下の方芝垣の尺切。白ふ一面南所内廣座尺の出割。狀のまゆう。ゝをべて皇居内長廊下の龍風の言樹の錦ゆて道具とまる。

ト志ゝりたる合方まゆ成り。正面の樣の下より。四方の丹下相ひ出て。下手の立木より二重へ上ゝ。あゝりと伺ひ上まへ回きかける。人言をゝるゝまて。一寸下手のたゝみへ寄をひそめる。上手の遣り戸ど靜ふ明け。内ゝり伊賀の局ふうち黒鄰の袴まて。雪洞を持出て下ふへ回く。丹下系をかぬけて上手へ回く。伊賀の局是の目をつけ。つがくゝと回

一個是獰惡男子。一個是纖弱女子。男子裝是衷甲短衣。女子裝是白綾裙袴。一場好鬪。九

演戯不可無此等趣絶光景況欠此一節何以見此女子有勇力處

きて丹下の帯ぎつとを取て引かどす。丹下ぼかよ驚く思ひよろ〳〵。そかゝみて女と知る事有て。ぶりてをゝ言問とたゝきおとす。是まてあかりきゝる。伊賀の局ふちゝ若と脱き白小袖まて丹下を引とめるゝてらやみの立回り。中間も〻ぐて丹下い伊賀の局よ叶ぬるよろ〳〵有。ドゝ伊賀の局い丹下のむおぐら取ておわ上る丹下是まて血を吐き為のる。伊賀の局是とちらぞ。

〔伊賀〕とのゝ人達おつとをるや怪きものと阻とめとり出合のゝ〳〵。

ト大音ふよぶ。バタ〳〵ゝ跡ゝ下の遠戸より田舎人ゝ拵を血義達頭帽子ち垂小具足附太刀まて走り出る是と一処よ。

ゝ本義達上下より軍兵六人各松明ゝ様と持出て来り。上下ゝとこのれて。松明と二重ゝ向けてさゝ出を。

〔主税也〕とのゝ里人義達とのゝ。

〔主税也〕シテ怪ゝきこものと伺ちゝハ。

〔伊賀局〕則ちゝれゝ。

ト子をとをかを。丹下パツタリたおれる。

〔主税也〕イデ縄おて引ゝさん。

ト丹下と引おちゝり見て。

ヤゝゝつの間よやら絶余おて。

〔伊賀局〕十二息絶へたりとゝ。

ト丹下とゝて。

自己反喫二驚處好。

見婦人裏娜情態處。最不可少。

ヤ、さていと久しくなりぬるとき。かあまつて余をたちしら。

〔三笠山〕茂て鳴るサヨ更及びしゝ驚入たる局の怪力。

〔伊賀局〕無量のかゝよ、余たち。詮議のまづるを夫ひしゝ。コリヤ思いぬあやまち。

ト一才ゝやくそくと。木のかゝら。

いたゝまゝ。

トたゞかゝきさいふゝ。皆〻局の力よ感心をる。此中の風の音おめたる合方まて幕。

引付ると。山おろしまて直ち引こんす。

本舞臺。常足の二重。砂地の張ものの巣臺一面浪布。ゆゝ蛇籠を置き。上下水除けの杭。土子つ大和國六田川と名た

る傍示杭。匂ふ一面。吉野山を遠く見たる。歌の遠見の書割。上下樹木の張もの。(泡へあり)まて見切りをべて六田川水の音して幕明く。

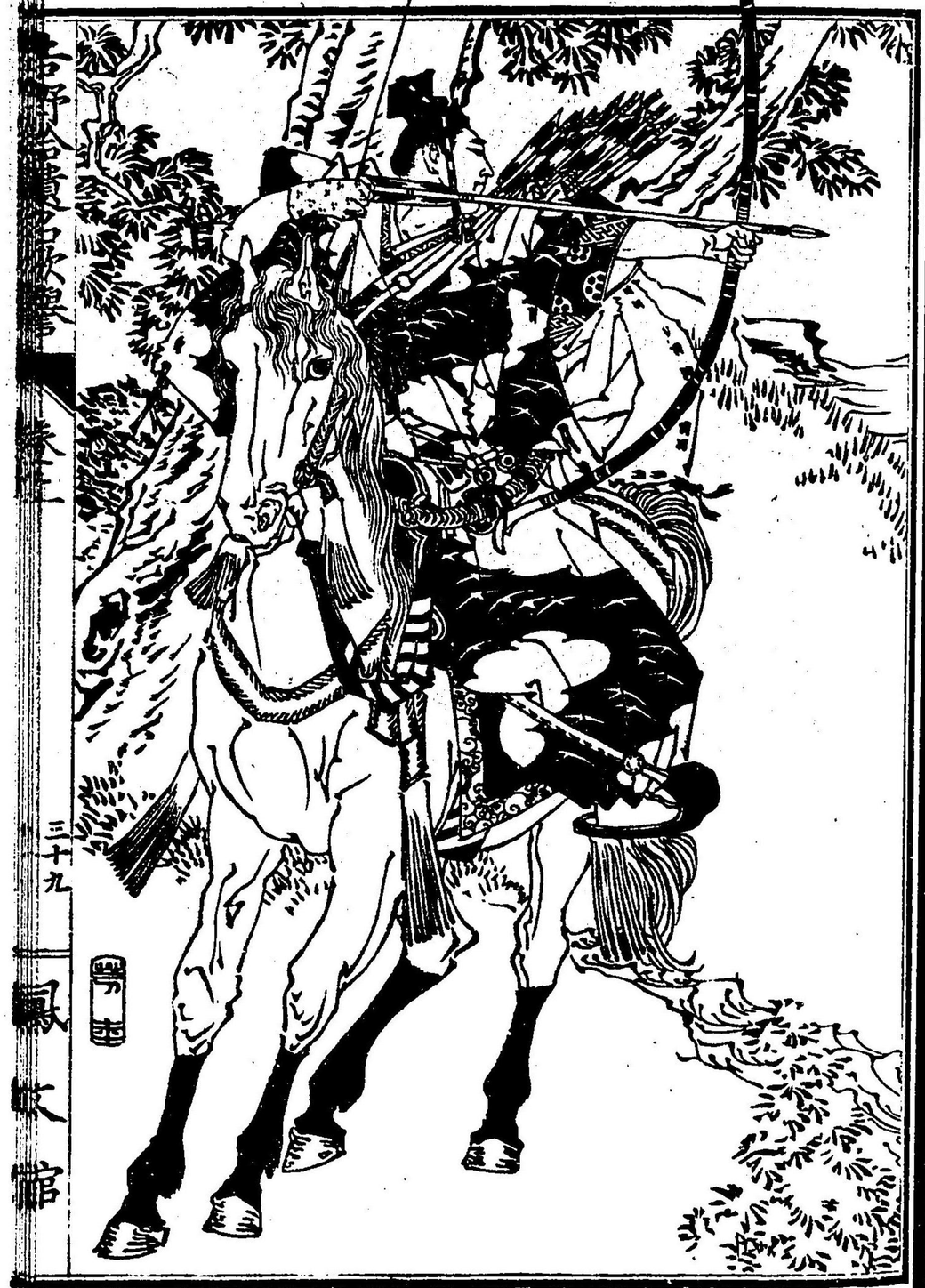
○附るはおろのやうな度〻の早さまでいかまうきるでいはざらぬ。

△其おかげでわしらまで救まいりといひつけられ。ゆうして迫てあるかゝやあら敗。

□怪しゝ者と見さあらぬそぐよ見出りのお仮人へ。知らとよとゝ〻ゝ者いひつけ。

○おんまゝろは吉野まい。天子様ゞ吉野る四元。九ゝのつよ

名將放箭救淑姬



みとゐふものゞ。

△そのゝへ植林とゝふ。とひようもるひ名將ゞつゐて居住わゞ宮さゝゐ。

□なんでゝ頁る章巻ひいきゝい。早ゐ軍サゞ猶ゐなり。

○世宮ゝ静ゝ成てノゥ。農業ゞで者る植ゐ方ならまや。他とゝふゝてわゝるもゞゞふもゝふも仕拵ゞゝい。

△どゝゞ宮ゞゞまふゆんで。

□むゝゝむかゝゝゐゐゝいゝものゞ。

○サゝく精出ゝて早ゐ廻つて仕まとゝひ。

□△そゝふゝゝゝく。

ト水の音ゝて三人上ゐへきいる。ヤハリ水の音ゝて。匂ゐより雅色一人烏帽子素花宮ゝ立附太刀さらじゝて。松明を持出る。次より白木の板塗ゐ製箱をゝげさるゝ。仕丁四人ゝて大れゝ早出る。ゝ内ゐ糸の内侍糸て孤る。次ゝ侍女二人ゝげ髪かぢら古代の衣裳ゞづきゝ被りゐ羽織て出る。次より雅色二人。その一人と同ゝ拵ゝて。松明を持出て。ゝ上ゝ平舞壇へ来る。バタくゝ成り上ゝより。婆種の所望ゝ先ゝ六人。キリワラかづら小具足附太刀ゝて出て来り。双方よりよゝくゝとりまき。

〔仕舞〕糸の内侍をおむゝひの為め。

○舞　戦く果まで糸上ゝゝゝ。

△あゝよい是よりして。

□法帰りあつて参るべし。

☒是から先い我くゞ。

※慥よ路次の警衛ホせが。

〔侍共〕ヨく法橋と。

〔六人〕かへられよ。

◎二階堂よりのお迎ひとい。法若多王寺。

☒ヲちらハどもい内侍様の法例の法用とつとむるもの。

(1)我くとても体を変げ。法体ホ三一上のらハ。

◎二階堂いおゝりあまで。

Ⅱ法体おゝい主かハらん。

四五個兵士。乗夜持兵来。何等蹺蹊。只是朦朧看做尋常伴當。殆是不人情。不知此是後文楔子。

(1)いざ法用迄参で法をらふ。

〔侍共〕イヤくまい無理ホ。我くハ内侍と寺殿もれバ。ハ置きホ。

〔六人〕かへられよ。

(1)たとへ。ホんとヤさるゝとも。二階堂まで法供ホもゞ。我くどもゞ供用て法をる。

◎おつきそひヤて。

Ⅱ多ゐで法をらふ。

〔侍共〕コリヤ是ハよ。ヤてもゝ一ハかへられぬとホ。

(1)いゞれホいていもお供ホせで。道でいそハでおかゝとおく。

ト仕丁ハ多ゐ図をる。

至此悟得。不是尋常伴當。

把炬火。一齊打落来。是暗号妙。

雜色不拔刀。甚妙。若拔刀格闘。只過絮繁。

〔侍共〕ド水の方へやめろ。今方は成り。双方一度は雜色の松明をたくさん高く上下より軍兵大勢出て。雜色二人と侍女二人、一度はかかる。

〔侍女二〕アレエ。

〔侍女一〕ヒたりやアふどんか。

〔侍女二〕ト雜色太刀をぬきふとまろを。大勢おりかさふつていたかの五人より礫をかけ。沙汰へる。此時奥の襖を内より上げて。奥の内侍数を出し。

〔内侍〕今兵の内かぬ法師の粒子。法つれる者共。まごあるふとい心得ぞ。若し之階堂の迎ひといふを。

内侍不叫苦呼救。此是留身分處。

〔侍共〕いのすを内侍を大内より。引出との格らつぐ。

〔内侍〕〔侍女〕エい。

〔侍〕きてい汝等い盗賊よあ。

〔内侍〕奈ゝの男ふ女ゝ。ヒどしや。

ト果して仕丁ヒどりかける。

〔侍〕ヤー廻るとておがさふ。

ト部等皆く太刀をぬき。サアヒ奥をあ。ヒ奥ぞ。

〔内侍〕ナニ侍共といい。

〔侍共〕サアヒ奥いそげ。ヒりぞいこれらまつ二ッたぞ。

○サアゆけ。

（六人）サア申けるくゝをげ。
ト使者始め申す。軍兵四人付て来をかゝせ。せきを立て上をいた
はる。軍兵うかれる付てをゐる。沢倍の五人と。郎等二人軍
兵四人のはいる。
（侍女）アヽコレたれぞ来てゆされ。
（内侍）内侍殿と申けてゆされ。
○申上ヽやうまゝ。参て立ると命ずねゝぞ。
（二階堂の迎ひと思ひ。）
（油汚）あゝ成るぞかりゝ。
（手迎ふ）ゝ口惜い。
○郎ふのう成て叶ふぬぬぞ。

一蹶以出下文。

不救内侍得。反救侍女雑色得。此是小波瀾。

△いゝゝて宣てへ浪ちの邪ヶ。
○不仕あゝうちも五人もろゝも。
△いでそゝ首とそねてゝをん。
ト五人をカとかざゝ立てゝる。七射白ハバタくゝ成る。楠
の郎等。南安八郎。四屋七郎。ギリワラ四ゝ。鉢巻小具足附
太刀を抜て打ち立て出る。沢より楠の郎等四ト格まて四
人走り出て来る。五人本毒者へ来る。七内へ七のり時ゝと
迎ひちらも。一寸立ちあて。獄門の郎等叶ぞゝて。時ゝ
上下へ迎げてをゐる。是まて五人の縄ととくゝとあて。
（八郎）石姓どもの知ゝせる。張藤わりとふり。
（七郎）古郎等ゝをせ付ゝが。シテゝ七場の板子へいゝる。

應前段。

(1)雜　シテあるゝふゆもきの庄方。

〔八帝〕柳ゞ帝宮まいて。宮殿ゝとゝまたる。陳中。

〔十帝〕狂藉みりとの所へ。立花長へかけつけゝ。

〔侍〕ゝらハども上より内侍殿の。

〔日〕帝宮の上ハいそ兼づゝ。

〔八帝〕ナニ内侍殿の庄宮の上とへ。

〔侍〕二階堂まゝ。叔母庄ぜんの庄宿等とおきゝあされ。

〔日〕偽りごゝいハ存なく。お上へ弦ひお物みゝ。

(1)雜　我く五人ハ抵なり。此ゝまで来りゝ如。

〔口〕何者れ仕りぎあるゝ兼てゝ者のゝるとゝへ。

〔日〕多人数まておつとりまき。弟の内侍のめさせゝる。

(1)おゝの傍ゝ奪ひ取り。立ち去りまゝ。

〔八帝〕ヤアゝシテゝお與いづまの方へ。

(1)雜　たゝゝ今山のゝの方へ。

〔八帝〕ムゝ遠くハ回くまん。引止ゝかけ。

〔十帝〕内侍の君と。お救ひヤさん。

〔八帝〕おゝもてゝ。

〔十帝〕いづれも庄住れ。

トハ帝ゝ弟宮等六人皆ゝいそひで上へ立ちゝ入る。

(1)我くどゝ沿よりつゝ。

〔侍〕内侍殿のおせんどを。

此一蹶。爲婦女。亦是少不得。

☒ゆーをすく。

ト立かゝつゝ。

〔乃女人〕アイタヽ。

ト身うちのいたむたあー。

(1)雜どふかされさ。

☒たゝかまぞと。

☒すふおあとと。

(1)ムヽおみたちふさりハ。

ト立上りよをとゝめ色と送具かゝりのしらせ。

乃よりぶいされ。

ト雜色(ぞうしき)三人いつきんよ上よをゝまんる。式ゆう水の音す

き今方まで道具すいる。

本毒毒毒年毒大おろ松の毒木。上下山の張もの。白ふ一面

山くのまそ。ちべてい田川つゞき山よのもゆう。毒す巴毒

の柿の印字六人(ぎの)巴毒の印字三人と。巴毒兵大毒とおろよ毒

廻り。はりーろよ四隅(まい)の毒てあるぶ。毒の巴毒(ぞう)と鼎(ぞう)てあ

る。

はげーき稲のつとめまて送具とまる。

トどさくさの方廻りまるー〜育て。トゞ巴毒の印字叶と

ぞーて上下へ廻げてを入る。横の印字六人毒と廻てをい

る。乃山おろーま成う。白ふよき如へがらを張の角と出を。

志つとりーを今方まゝ成り。奥の内より奥の内伯ふうち毒

慶應義塾大学図書館

緋の袴うて出来りかつと思へ。

〔赤内侍〕思ひがけなひ狂藤よ。西も東もこのらねど。音ひさえ
自然と。迷ひあるべよそふぞや。

トかへ行きかける。法師上手の奥へ袴姿平内左衛門つ。

立並ん帽子附左ヵ姫の格にて出来り。

〔平内〕筆づかひあらなる乗の内侍。身共がおくつついつかいそふ。

〔赤内侍〕そういふ所へ。

〔平内〕警固平内左衛門つ。対面でゐる。

〔赤内侍〕まあとふ和どのい対面度。ふてあるゝ。

〔平内〕先刻より居所ま。御身の来ると待ておつて。

〔赤内侍〕ナニ。侍づい居さいと。かゝや。今の狂藤とのい。

老奸口氣妙。

〔平内〕いゝよも身共が来のもの。

〔内侍〕エヽ。

トびつくりとうとまる。今方かゝつて。

〔平内〕こゝ琴きいてゝ。ゝ居れど。まあより意振も意慢も世けれど。

其うつゝは安額ま。ぞつよん木れゝ其人のうら。居身とぬと

んで呉ようとある。錬義ふひねみと更者ゝ。仔氏仁のわの

方ぶ。病家をりといひ掛へ。ぢんまりと寄すぐ引出ゝ。御ぶ

と暮ふ甚ない。仕来ま。待ちのへ。ぶ。ぶどもと一処ま来られ

よ。

〔赤内侍〕スリヤ叔母上の方大病い。偽りぶで有りたるぞ。そ

きく上いたぶゝてい。

猶不説出来。

ト立上て行ふとせる舟。京袴の裾を志つかりふまへて。

（平田）迎るとも迎そふ。もうこのふあつさら呂死ぢあひ。のぢれぬふと覚悟めされ。

（番田佐）おふ法上い。

ト用侍懐剣をぬいて。切りかける。一寸主田り。時京そのよときつと成り。

（番田）ちよこざいあそむ。ひどそ。ふ法上いよ窮よかりしてつもりかん。

ト用侍の刀とお庇し。主ゆうふとせる。法舟上下よ以夢の八帝七帝出て来り。用侍とうだひきつとふる。

（八帝）ヤア御ハ浮世時京よふ。

（七帝）用侍ととらへて法猪藉。

（八帝）イデ縄お。

（七帝）引立田りん。

（番田）何のやつふるう我よ向ひ。ふむかい立い世裾ふやつ。

（八帝）ヤア無禮とい汝ぢ事。かく云ふ我い楠家の帝子。南天八帝。

（七帝）呂尾七帝。庇ふ知とざる汝ぢふるまひ。

（八帝）サア高帯ふ。

（ふ人）縄ふう垂

（番田）何と大しやく。ふ。

ト縄への呂そのよ成り。呂田ふ系つい二人をおおふ主田

二人縄能敵平内。以見平内身分。不

女丈夫。自然應如此。

看者至此謂。楠公不自下手。救内侍了。不知更一轉。生下文来。

是見平内身分。是
槿舉正行身分。

かよおろ〳〵みる。よき時分まで上下より警蹕の御警二人出て
来り。

○御ヤアヤアとゑ人出る。

△おろ〳〵うろたえり〳〵。

〔宮内〕よゐ処へ。ゑ人か参いる。

〔ゑ人〕心得まし〳〵。

ト ゑ人双方へかゝる。三回りの内宮内い内侍と引立て上
手へ入る。

〔公卿〕ひきとやつてい。

○御何と。

ト 又三回つゝきんへ。初らせる付。六田川赤山〳〵とゑん

たる遠見の送兵幕をふりおとす。
神のつゝもゆる成り。上手より四方の鉦鼓二人。軍兵三人と
立回り赤ぐら出て来り。いろ〳〵おゝしみの立回りあて。
ドヽ 軍兵付ちぞ下みへ逃てを入る。鉦鼓三人是を出そて
入る。山おろし成り初らせる。つき。
道具幕切て落す。
本舞二面道〳〵宮の二重。岩山の張ものの。嶮岨のとゆう滝
へあり。二重上の方大ある岩山の張ものゝ。奥の方へダラく
おりロ。下の方回ドく岩山の張ものと。二重まるて中
途山道のもゆう。後ゝ樹木のあしらい。向ふ一面山ゝ遠見
がら張の月。をべて山添への中腹道のてい。山おろ

まて道具法る。

ト二重下手の岩山の百々奥より。矢の内侍雅の袴のまゝ
逃て出て。二重よき処うてたゝろぶ沼より平内左衛門出
て出て。三重とゝらへる。一寸三四りて。トゞ内侍を引立上
手の上り口へ。ちかへる。侍るのおとる。
「これ岩石巌」なる山壁い名まおふ吉野の山つゞき。隈
ふき角も新てゝ。岩とつゝふ山道のいとゝのをだいき
山中ふ。あちれ内侍いくせをの。おてふまかゝるうきか
んぎ。をでは名き村しとあを。後るふ鞭おち走せ来るハ冷
南部の柱石と人も知る植左金吾山沼が。立烏帽子優
美のをゞ。そびらふ頂ふを白羽の征箭。あさりと持て見

敵一婦人。何煩名
将手。有懐貳二字
偏妙。

正行随兵。縦横奮
闘。拯其熱闘。至叙
正行則只此一箭。
詳略極好。

ゝるい。めざまゝゝをまさいさまゝ。
ト大ふへり弧への弓とのを成り。ふバタくまて。植山沼
総を垂烏帽子附太刀をびらを脊おひ弓を持る。奥ふて走
り出る。ゆりを等二人。を給と持弭をひ走り出て。花道よ
き処よとまり。ふとをきつとゝて。
（兵）矢の内侍が名雅の知らせ。きゝとを作走付しが。アレく
矢目ふ来れ。いるのらねど。遠の山の畑づゝひ。女といと
む面をのをそ。まゝゝく警垂を面左表つ。童で呂称る氏お。二心
といふく反賊射系。いでや一矢お射とりくれん。
トよろゝくゝ弓よ矢とつゞひ。切てをゝるゝとゝて。
それ

ト泥への口ものまそ。山行る事のまゝむちを打て一ッさんよ本蓑屋より上よりそみる。帝景二人付てたみる知せる付。上道其右づうよ分也。

作者自評

山行る上りて弓と射るの一張る。中昔の武士ゞよく射と用ふるのうちとみせんとの為新ゆり弓も物を用ゐ般をの餘のものまで巧く拵て。矢とぬき出し仕方。みる上りて扱つ仕方。よくその古事とゝして。昔の武士のさまいゞ〳〵あらんと拵せ〳〵むるのさなり。扱よ蓑屋より上舟人とあらしめゞして。矢と十分よ拵こもの。矢尻ゞ〳〵びよ徒出りの方まで出きらしむる方なり。又

云貴射戦れよるを射て的よ中ることとなるのうらみ。その所作といふこの矢〳〵。又箭のこのうみ中う。矢と抜出ものの彼を。昔右よりして古をゆむこのい濁れども。世の中絵てんるりのあるをば知るものもあるべし。弓筈の黒械を持焼埼まてこを見れども。いろみして用ふるこのうゆ知りゞ〳〵きこの矢〳〵。よりてこを弦の弭と屋〳〵ものうゝちとんせしめむとなるも。亦無益の事なるのらさるべし。

本野蓑のつゞき道具。上の方よりタ〳〵よ。平蓑屋にゆり山道のこゝ中。山中のもゆう結〳〵泥へあり。的ふ道えのよき処へ。がらす張の用。そべてけを具泥へあり。なよ二重

時景中箭。如此叙去不費力。

の下の方ふ弟の内侍拘りまを蓋て動家を悩むてはぐり歩きまりて是と未拵して居る。二重上の方ふ。以前の御同だ閉ひ。矢の三つ〻る侍よたかれ死して居る。平家屋上の方ふ。以前の御菅こ人、山形の蔓るを引きぬひくて居る。山おろ〻まていさ長とまる。

〔正行〕某三つ〻ありしらひ。ほ家蔓ひいはいと。心とたゝる ふ持ゞ人。

〔内侍〕おもひゞまゞも。城注の辱とまぬゞ和し。全く和君の恩思るよる。何をもて報ぜべき。のりゞくき恵みまゝ。

〔正行〕コハ思ひよらざるものお云ゞ。さゝひこんもちらぬく家 りともかゝる狼藉ふ出逢ふらよ。たゞお拵とおるゞ。

思慮詳密。言語温藉。其人可知。

此一句。見梅枝為人。又是怪評語。

まゝてやは身い宮中に事へかゝる女房ふるよ。ゞ一城注 ほ〻〻〻〻辱められんよい。ほ身の恥辱のみあらず。君の恥 辱を上あらゞ。かくやうと正行等。守護の役めふおこさゝし。其 罪おゝしとも。きれゞ。扨よく道ふ出合ゝいほ身の幸ふるのみ かいほ正行もおかゝとまゝとゝもの。さるまゝてもにくむべ きハ。警幹附系。城注ふ内在るよゝと。風ゞよ知るゝものゝら。 うる狼藉ふ及ふ事ゞ。ぞふぬふる事ゞらん。ほよゝしつぶさゝふ 奏聞して。典薬の論議ふ及びやさん。

〔内侍〕まゝ付て心得ぬ。日ひやさゝき梅ゝ枝ゞ。何かゝ和 らよ一味せゝか。

〔正行〕ナニ梅ゝ枝とハ。

省得好。

省華又好。

〔四位〕弘いそ四ろ〳〵かさりやきん。
ト山おろしてそ。平蓬屋上よりいそのの帝華八帝七帝
出て来り。
〔八帝〕我君よれしまおろさりえしー。
〔七帝〕曲ものどもハ一人のらず。
〔八帝〕からめとり来て。
〔五人〕庭上り来る。
〔四位〕ヲー太義〳〵。是成る射京の死獄もろしー。そらへしーうの
ども。一回ハ射左四へ川ろよ。
〔八帝〕ハ畏て庭上り来る。
ト八帝づう〳〵と二重へ上り。警蹕平四ハ矢とぬきとる事

有り。
〔八帝〕胸さゝ綻深ハ射ぬられて。唯一矢ハ即射の最金。
〔七帝〕奈君の庭ハまざれ。今ハそでわぬるるぐら。
〔五人〕畏れへて庭上り来。
〔四位〕生ぐらんと思ひしーうど。四侍ハあやまちいらんとなそ
れ。やむるすと射ぐ計えさり。
〔四位〕きゝ〳〵しー八幡どの。築紫の八帝ハ。おさゝおとらぬ
庭ら密。わらいを賞ぐへまーさ。
平蓬屋上下より。いそのの雅楽ハ侍女二人仕丁四人楽と
舞出て。
〔侍〕四位殿ハ庭無殺して。

雜色侍女。一齊了結。此等處。非老手不能。

図 侍　大れまかわさり迷ーまーこう。

(1) 雜　まづいおかとりなきてれとねー。

(二) 同　我く一同いう斗りう。

II 同　大慶至極な。

〔五人〕　ねドもまり来る。

〔内侍〕　正行ぬーの思けまよりぱらず老婦とのがれーどや。

〔正行〕　其節ドーの教訓ふせを。内侍まいイザあを所ふる裏へ。

〔内侍〕　それでいあまり。

〔正行〕　其斟酌ハ世言ふ事。きみよつ。ふる古分ふを。我分ふーて我才ふあらど。敵のふけぬ百まおーてもよふ。

〔内侍〕　出ちば作よ隠がちん。

英雄美人。兩々相對。多少心情。宜在無言之間。是作者苦心處。果有名能優得此意者。其妙不可言也。

ト立上り正行と敵を見合せるとホのかーら。

正行ぬーー身とへりドつて。

〔正行〕　まづく。

ト一礼ちる。内侍ハ正行ど見てあつぱれ豪傑いと頼母しどゝ云ふ意味あひ十分ある。平舞臺の一同。平伏ちる。はらやう双方ひつぱりよふ。ーく出おろー。

大ふ入り緞の幕。

作者自評

内侍が正行の弓勢を不むる所ハ。ちっともこの後とつとむるものゝ注意べき事ふーて。その武勇を感ぜ。自らその人品をも慕ふ所を言語の外ふ示ーて。えるもの

とーて。何とかく慕いしく思いきる仕打。十分ありたし。
うぐそこの武勇とほむるのみふーて。さらふ色合なきや
うなそい。他者の用ゐまそむくこの也。

慶應義塾